信濃町メディアセンター古医書コレクション
－富士川文庫を中心に－

近内絵美里（こんないえみり）
（信濃町メディアセンター）

信濃町メディアセンターの古医書コレクションには「富士川文庫」「石黒文庫」「寄贈本集成」「長谷川文庫」がある。大半は『古医書目録』[1]にまとめられているが，後に収蔵された資料も若干ある。「長谷川文庫」は『古医書目録』ではなく，本学メディアセンターの総合目録KOSMOSに登録されている。

1　古医書コレクションの概要

(1) 富士川文庫

1918年頃から20年以上にわたり本学医学部で医史学の教鞭をとった富士川游氏（1865-1940）の旧蔵書である。およそ1,700点，3,600冊近くにのぼりコレクションの中心を占めている。富士川氏は1912年５月に帝国学士院から恩賜賞を授与された大著『日本醫學史』[2]をはじめとした数多くの著作を著し，日本医史学の確立と発展に多大な功績を残した人物である。

富士川游博士［慶應義塾大学医学部
18回生（1940年）卒業アルバムより転載］

(2) 石黒文庫

陸軍軍医総監であった石黒忠悳氏（1845-1941）の旧蔵書で，文書や書簡を中心とした160点ほどの資料群である。武見太郎氏（本学医学部卒業生であり，日本医師会会長や世界医師会会長を歴任）の仲介で，1963年９月に遺族より寄贈された。なお，石黒氏は『日本醫學史』[2]に序文を寄せている。

(3) 寄贈本集成

上田撥一氏，内野仙一郎氏，杉田つる氏，鈴木諒爾氏，瀬尾賓三氏らにより寄贈された資料で約600点にのぼる。杉田つる氏は杉田玄白の子孫にあたる人物である。寄贈本集成には『解體約圖』(1773)，『解體新書』(1774）とその原書である『Ontleedkundige Tafelen』(1734)（ドイツ人医師Kulmusによる『Anatomische Tabellen（ターヘル・アナトミア）』のオランダ語訳）などが収められている。

(4) 長谷川文庫

本学医学部内科学教室で教授を務めた長谷川弥人氏（1912-2006）より寄贈された，江戸から明治期の漢籍を中心とした資料である。その後2012年９月に本学医学部漢方医学センターより追加の寄贈を受け，2019年現在は240点ほどのコレクションとなっている。

2　富士川文庫デジタル連携プロジェクト

富士川氏の旧蔵書の大半は，氏の生前に京都帝国大学へ寄贈されている[3]。当センターが所蔵する富士川文庫は，鎌倉の自宅に遺されていた医史学関係の資料について遺族から寄贈を受けたものである。なお，江戸後期から明治期の教科書や教育関係の資料は東京大学へ[4]，1934年開催の「第９回日本医学会医史展覧会」に出品された医書や掛軸などは日本大学図書館医学部分館へと寄贈されており[5]，これらの資料すべてを合わせると富士川文庫の全体像を概観することができる。

分散している富士川文庫の全貌を明らかにする試みとして発足したのが，京都大学図書館機構と本学メディアセンターによる「富士川文庫デジタル連携プロジェクト」である。各機関が所蔵する富士川文庫資料のデジタル画像をインターネット上で仮想統

合して表示するもので，2018年９月には試行版Webサイト[6]を公開した。2019年２月には東京大学教育学研究科・教育学部図書室が所蔵する資料も追加公開され，連携の輪が広がっている。本学は2019年４月現在約780件の資料を公開しており，今後も約700件を順次追加する予定である。本プロジェクトは2020年度末までに，新機能開発などを視野に入れた本稼働を目指している。

富士川文庫は『日本醫學史』[2]をはじめとする多数の著作の執筆のために蒐集された参考資料である。そのため，資料の中には氏の手によるものと思われる書きこみが随所に見られる。愛書家のコレクションとして趣味的に蒐集されていたわけではなく，日本の医史学を紐解く重要な研究資料として細部にわたって解読，分析されていたことが窺え，氏の調査研究の足跡を辿ることができる。ぜひプロジェクトのWebサイト[6]でデジタル画像をご覧いただきたい。

3　富士川文庫収蔵の杉田玄白未刊随筆

当センターが所蔵する富士川文庫のうち特に希少性の高い資料が，杉田玄白による未刊の歌集『鵲斎遺稿歌之一』（写本）と，同じく未刊の随筆『耄耋獨語・玉味噌』（写本）である[7]。

『鵲斎遺稿歌之一』の鵲斎（いさい）とは玄白の号のひとつで，443首が納められた歌集である。『鵲斎遺稿』は富士川文庫デジタル連携プロジェクトのWebサイト[6]および本学メディアセンターデジタルコレクション[8]で閲覧することができる。

『耄耋獨語』は「ぼうてつどくご」あるいは「もうてつどくご」と読み，「老いぼれの独り言」の意である。老いによる自身の身体の衰えを，医師としての冷静な眼差しで詳細かつ赤裸々に綴っている。著名な蘭医学者であり優れた臨床医でもあった玄白が「老いの辛さも知らずに，長寿を羨んで心を労するのは無益なこと」「長命は詮ないもの」などと語っている。玄白が満84歳で亡くなる前年の1816年に著されたものである。

この『耄耋獨語』と合わせて綴じられている『玉味噌』は，その序文によると「片田舎に住む老人が物知り顔で綴った味の悪い手前味噌（自慢話）」の意であるという。「元より出世を望んではいなかったが『解體新書』を著したところ，たいへん珍重されて人々に名を知られることになり数多くの恩賞を賜った」と素直な喜びを綴っている。

『耄耋獨語』『玉味噌』からは玄白の人となりが窺え，偉大な蘭医学者とは別の顔を見ることができる。成功を喜ぶ一方で，親しい人々に先立たれる長命の悲しさ，心身が思うようにならない老いの辛さ惨めさを嘆く，ひとりの人間としての玄白の姿が浮かびあがってくる。『耄耋獨語・玉味噌』は国文学研究資料館の新日本古典籍総合目録データベース[9]でデジタル画像を閲覧することができる。

4　古医書コレクションのデジタル化事業

当センター所蔵富士川文庫の一部は，国文学研究資料館による「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の一環として2015～2016年度にかけて撮影され，デジタル化された。2018年度からは当センターの事業として，古医書コレクションのデジタル撮影と公開を続けている。これまでに撮影した画像は，富士川文庫デジタル連携プロジェクトのWebサイト[6]，本学メディアセンターデジタルコレクション[8]，新日本古典籍総合目録データベース[9]で閲覧することができる。

注・参考文献

1）慶應義塾大学医学メディアセンター．古医書目録．改訂版．東京，慶應義塾大学医学メディアセンター，1994，176p.
2）富士川游．日本醫學史．東京，裳華房，1904，1261p.
3）京都大学附属図書館．第３章第３節 蔵書“富士川文庫”．京都大学附属図書館六十年史．京都，京都大学附属図書館，1961，p.203-204.
4）東京大学教育学研究科・教育学部図書室所蔵富士川文庫（東京大学附属図書館）
https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/fujikawa/,
（参照　2019-08-05）
5）穴沢順子．日本大学医学部図書館所蔵の古医学資料とその利用．医学図書館．1994，vol.41，no.2，p.157-158.
6）富士川文庫デジタル連携プロジェクト．
http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/rdl/digital_fujikawa/
7）大鳥蘭三郎．杉田玄白著未刊随筆本三種．医学書誌論考．京都，思文閣出版，1987，p.54-58.
8）慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション
http://dcollections.lib.keio.ac.jp/
9）新日本古典籍総合目録データベース（国文学研究資料館）
https://kotenseki.nijl.ac.jp/